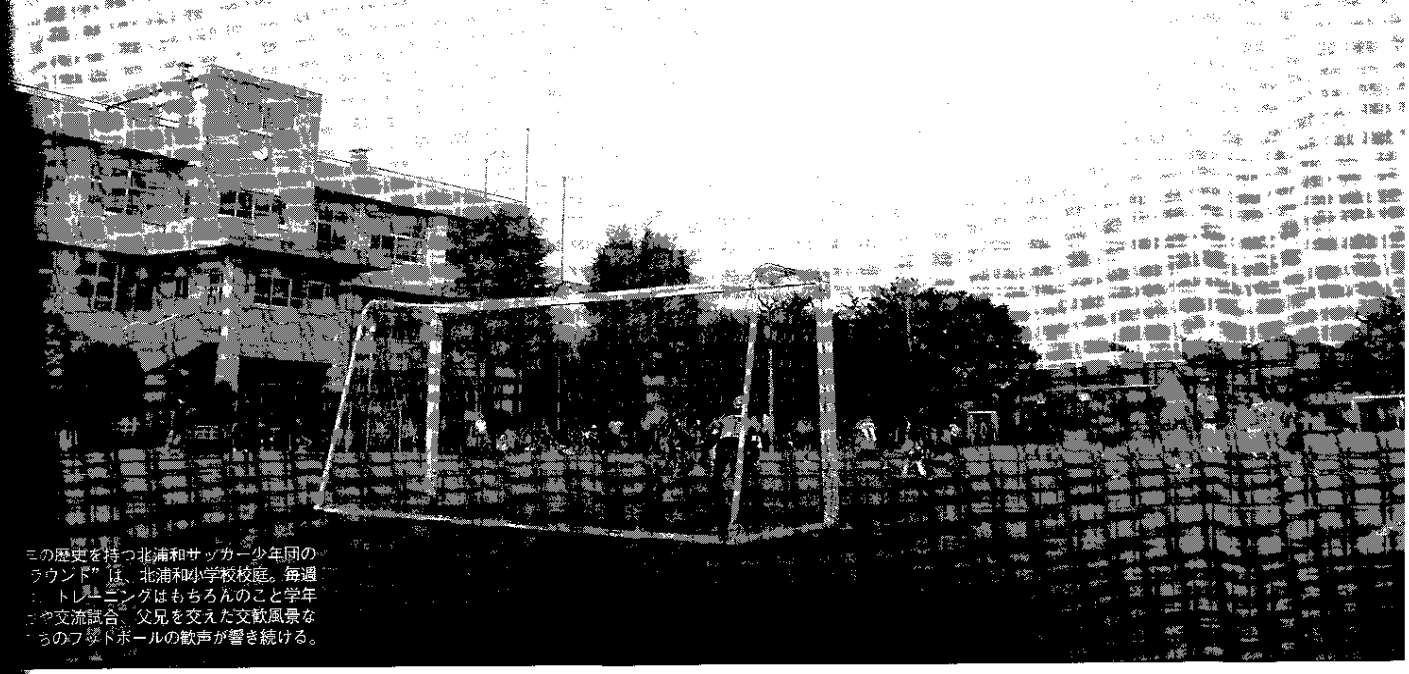
らがホームタウン、ジュニア世代の指導現場をゆく

浦和のサッカーは、子どもたちに託す』

～ 名門・北浦和サッカー少年団の現在 ～



この歴史を持つ北浦和サッカー少年団のラウンド"は、北浦和小学校校庭。毎週トレーニングはもちろんのこと学年や交流試合、父兄を交えた交歓風景なちのフットボールの歓声が響き続ける。

いまや浦和といえばレッズのホームタウン！　だが、かつてこの街は全国高校選手権など学校単位でのチャンピオン校がひしめくサッカーどころとして知られる場所だった。人間教育のスポーツとして、ひろく子どもたちにサッカーを浸透させたい……。Jの花形・レッズの躍進の陰でホームタウン浦和が掲げてきたサッカーの伝統は、変わらぬ熱意によって受けつがれている。

「楽しさと強さ」を教えるトレーニングを探して…。

～ 総監督と団長に訊く、ジュニア年代の指導テーマとは ～

サッカーおけるジュニア年代の指導の大切さが叫ばれている。目先の勝利をつかむコツを教えるのか、やはり少年たちには「楽しさ」を教えるのか、はたまたプロ育成としての「強さ」も作るべきなのか。サッカーの街で40年間に渡って育成を続け幾多の人材を送り出してきた北浦和サッカー少年団の歩みも、その模索の連続であったという。総監督の吉野弘一さんと団長の吉川政男さんに聞いた。

Q　練習マッチとトレーニングを拝見したのですが、子どもたちがみんな明るく伸び伸びプレーしているのには感心しました。

吉野　練習のムードづくりにはけっこう気をつかっています。私は南高（浦和南高校）サッカー部にいた経験があるんですが、まだ小学生年代の子どもたちには高校年代のような体育会風の厳しい練習は合わないし、私自身もそういう雰囲気があまり性に合わないという面がありまして（笑）。

Q　それにしても休日とはいえ父兄の方までこんなに集まって、なんとも和やかな雰囲気で……。

吉野　うちはアルゼンチンのボカ・ジュニアーズとの交流関係もあって、私も何度かブエノスアイレスまでお邪魔したりしているんですが。向こうでは休日ごとに子どもたちまで交えて、クラブライフの雰囲気が素晴らしいんですね。父兄や近隣の人たちも集まって、ゲームや練習はもちろん合

『浦和のサッカーは、子どもたちに託す』

～ 名門・北浦和サッカー少年団の現在 ～

や指導サイドの関係者など多くの人々で賑わっていた。木陰に用意されたテーブルでも、軽食や飲み物を囲んで談笑する選手や父兄の声が響く。「次のカップ戦では○○さんちの○○クンが、右のボランチで起用されるんですって。応援しなくっちゃいけないわね」グラウンドサイドで囁かれていたママさん談義のディープさに驚くヒマもない。なんと練習マッチのハーフタイムには、先のU－16アジア選手権で優勝を果たした日本代表の主力メンバー、山田直輝君（浦和レッズユース・MF）が自転車に乗って現れた。

Q 来年の世界ユースにも出場する日本代表のMFも、こちらの卒業生なんですね。

吉川 山田君のところはお兄ちゃんと兄弟そろって北浦和少年団。お父さんは元日本リーグの選手というサッカー一家です。やはりここの雰囲気をるんですよ。

吉野 そういう部分は団長の吉川さんのキャラクターが大きい。いろいろな催しがあって処理や交渉が大変ですし、父兄の皆さんとの関係も築かなくてはいけない。私が指導や監督業に専念できるのも、吉川さんや周りを固めてくださっている役員さんの雰囲気づくりのお陰ですね。

Q 少年団の運営にはムードや大人たちの結束が大切なことがよく分かりました。さて、お話に出た肝心の「指導」の部分について伺います。ジュニアの指導の重要性が指摘されて久しいですが、監督としてはこの年代の子どもたちに対して、どんなテーマでサッカーを教えていらっしゃいますか。

吉野 私は19歳のときからかれこれ30年以上に渡ってこのチームの指導を承っていますが、指導サイドにも子どもたちにも大きな変化が起こり続けた印象がありますね。その中で特に重要なのは、年々子どもたちの技術的なレベルは高くなっていくのにそれに伴う体力が追いつかないという問題です。統計を見ても子どもたちの体力低下は著しい。勉強だ、習い事だ、ゲームだと実際に現代社会で彼らが体力をつける機会を失っているからなのですが、これではサッカーができない。このポイントから解決しなくてはなりません。

Q なるほど。いまの小学生たちは忙しくて外で遊んで体力をつけるヒマもない（笑）。しかし、どんな方法があるのですか。

吉野 現状で有効なのはリズム体操を採り入れたプログラムです。サッカーと共有できる動きやリズムも多い。一定時間で適正に体力を上げていく効果はかなり役立っていますね。

Q やはり昔のサッカーの〝部活〟のイメージとはずいぶん違う（笑）。

吉野：そうですね。でも専門のトレーナーさんのメニューに従ってずいぶんと効果も上がっている。子どもたちも高学年になるとともに逞しくなっていきます。

実際に少年たちの練習マッチを見ると、身長130cmくらいの低学年の小学生たちでも競り合いはかなりハード。ゲーム終盤になっても、チャージやタックルは大人顔負けの応酬をやってのける。この年代でも当たり負けをせず、ケガも未然に防げる身体づくりのメニューは重要な課題だ。

リレー方式で争われるドリブル競争。元気な歓声が響くが、ボールコントロールをする眼差しは真剣そのもの。

北浦和駅からの「浦高通り」は少年選手の通り道。浦和レッズを応援する地元商のフラッグの赤が目にしみる。

北浦和少年サッカー団とは？

昭和40年の創立（創立者・田中英次氏）。全盛を誇った浦和の高校サッカー部OBたちが結成した「浦和キッカーズ」のメンバーが、市内の子どもたちを指導するために作った組織が原型といわれる。今井憲晃氏（現後援会長）、倉又寿雄氏（現FC東京監督）ら幾多の名選手を輩出。全日本少年サッカー大会、出場2回。53年大会ではグッドマナー賞を受賞している。資料をひもといて驚いたのだが、北浦和サッカー少年団は全国に存在する「スポ少」に先駆けて少年団を名乗った最初のスポーツ団体なのだそうだ。

北浦和サッカー少年団を支える二人、吉川政男団長（左）と吉野弘一総監督（右）。

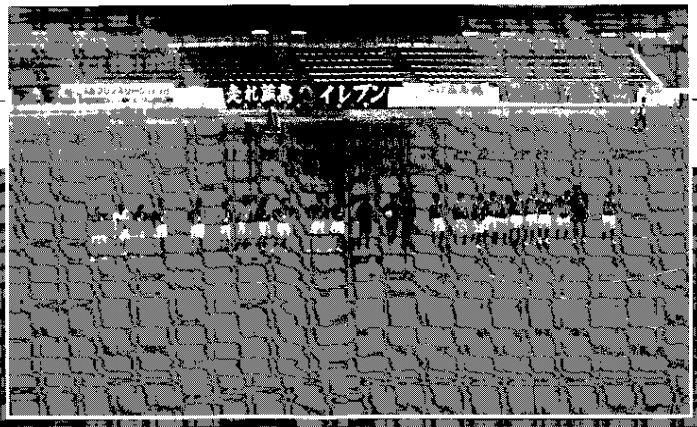
Profile／プロフィール

吉川政男さん（きっかわ・まさお）

'44年1月26日、東京都北区生まれ。浦和白幡中学でサッカーと出会う。41年間にわたる社会保険業務のかたわらで父母会会長などの役職を務め、'79年より北浦和サッカー少年団に関わる活動を始める。高校時代の同級生である好子夫人との間に4児あり。長男はコーチ、孫も選手として北浦和サッカー少年団に所属するサッカー一家。

吉野弘一さん（よしの・ひろかず）

'55年、旧浦和市北浦和生まれ。北浦和サッカー少年団でサッカーに出会い、浦和南高校在学中は地元クラブ「浦和キッカーズ」でプレー。卒業後に北浦和サッカー少年団監督に就任する。指導者として全国大会出場5回、優勝1回、3位3回。ブラジル、アルゼンチンでの指導歴、研修歴多数。現在、自身主宰の「フガルサッカースクール」で全国の子どもたちのサッカー指導に当たる。



特別寄稿

サッカーの街浦和の輝く原石たち

―浦和レッズユース・ジュニアユースのFC浦和出身者―

浦和レッズにとって、「浦和」というのはホームタウンであり、アイデンティティでもある。
そうした浦和で生まれ、浦和レッズの中で育ちつつある才能たちを取り上げてみたい。

text by Lが れくとけ

［山田直輝］

1990／7／4生まれ
164cm／60kg
（北浦和サッカー少年団）

U-17W杯コリア2007から U-20W杯2009、ロンドン五輪を狙う 次代の〝浦和〟のエース

彼についてはくどくどしい説明は必要ないだろう。いまだ高校2年生ながら、サテライトリーグでもプロ選手に遜色ない活躍を見せ、試合に影響を与える存在となっている。

その存在はもちろんユースチームでも顕著で、彼がいるといないではチーム全体の実力が1ランク変わってしまう。

先日シンガポールでAFC U-17選手権としては12年ぶり2度目の優勝を飾った同世代のU-16日本代表でも、ポジションの関係もあって柿谷曜一郎（セレッソ大阪）や水沼宏太（横浜Fマリノスユース）のような取り上げられ方はしないものの、チームの心臓として評価されている。あるいは彼の身長の伸びがあと5cmなのか、あるいは10cm、15cmなのかということは日本サッカーの未来をも左右するような問題になるかも知れない。

身長の件は冗談だが、レッズにとっても彼の存在は次の「赤き血」となるべき存在であるのは間違いない。

［石沢哲也］

1991／5／31生まれ
170cm／58kg
（北浦和サッカー少年団）

中盤の底でチーム全体をオーガナイズするボランチ

当初はいわゆるトップ下というような攻撃的MFのポジションでプレーしており、同じポジションとどう折り合いをつけていくのかと思っていたが、中学3年になると、原口はFWに一列上がり、彼はボランチに一列下がった。

彼の長所は視野の広さと卓越したボールテクニック、それに抜群のボディバランスで、それが攻撃面ではFWを抜け出させるスルーパス、破壊力のあるドリブルとして表れる。

守備面でも適切なポジショニングと卓越したボールテクニックでボールを奪取し、そこからの素早い攻撃への切り替えがチームの戦術的な特徴とさえなっている。

チームメイトの原口が注目されがちだが、全国3位に躍進した2006年夏のクラブユース選手権では、予選リーグ中に膝を痛めて欠場した原口に代わって、チームを準決勝まで導いた。

また、原口はその後飛び級的にユースに混じって試合に出るようになっており、ジュニアユースチームからは離れることが多くなっている。そのこともあって、チームにとっての彼の存在はますます大きくなっている。

高円宮杯ユース選手権の関東大会での敗退を受けて、彼らの舞台はジュニアユースからユースへ